

兵庫県産テントウムシ類[※]

高橋 寿郎

Coccinellid-Beetles of Hyōgo-Prefecture

By Tosio Takahasi

てんとうむし(瓢虫、Lady-Beetles, Ladybirds, Mainen-Käfer, Marienkäferchen 等)は鞘翅目(Coleoptera)、多食亜目(Polyphaga)、てんとうむし科(Coccinellidae)に所属の種の事を意味する。てんとうむし科はさらに三つの亜科即ちSubfamily Lithophilinae Ganglbauer, 1899, Epilachninae Ganglbauer, 1899, Coccinellinae Ganglbauer, 1899 に分けられるが始めの Lithophilinae 亜科のものは日本には産しない。此のてんとうむし科には全世界で 247 属 3000 種(素木, 1954)、或ひは 3500 種(三輪, 1938)も産するそうであるが、日本にも可成りの種を産し現在此の科のまとまつた目録とか研究が無いので確実な種数はわからないが大体 100 種位は産すると云はれて居る(中根, 1955)。

此の科のものは体がやや平たく長めのものも 1、2 あるが一般には半球~半短卵形をした中形乃至小形の甲虫で食草性にして害虫として有名なものもある反面アブラムシ類或ひは白濁菌を食し益虫として著名なものも可成りあり吾々人類には関係の浅からぬ仲間である。

兵庫県下に産する此の科のものに就いては今迄何等まとまつた報告が無いと思はれるので此処に今迄の記録と筆者の採集した此の類の目録を発表して見たい。勿論筆者の採集した所は神戸市中心なので県下全般と云う事になると今後の調査に依り完成に近づけねばならないと考えられる、此の点に就いては本報文を第 1 報として時機を見て第 2 報以下にまとめて行きたいと考えて居る、亦種名同定に就いては出来るだけ正確を期したつもりであるが尙浅学未熟の為め誤りもあるかと思はれる、記録洩もあるやも知れない之等の点に就いて御教示頂ければ幸と思う。

尙ここに兵庫県産てんとうむし科として記録する各種に就いては其の大部分が日本昆虫図鑑(担当、故湯浅啓温博士)(1950、北隆館版)、原色日本昆虫図鑑、上巻(担当、中根猛彦氏)(1955、保育社版)に図説されてるので本文では記載は出来るだけ省きそれを参照して頂く事とする。

末筆乍ら種の同定を御願した西京大学、中根猛彦氏、文献に就いて御世話になつた佐賀林業試験場、和田義人氏、シウクホシテントウに就いて御教示頂いた柴内俊次氏の諸氏に厚く御礼申し上げます。

Family Coccinellidae

Subfamily Epilachninae

DIEKE, G. H. (1947) に依り従来此の亜科に属する日本産は Genus *Epilachna* の 4 種のみ知られて居たが其の中の 1 種 *E. admirabilis* CROUCH は新に Genus *Afissa* DIEKE に移されたので、現在の本亜科の日本産は 2 属、4 種となる。

尙 Genus *Epilachna* の 3 種に就いては従来可成り学名がまちまちであり、現在に於いても多少学名の採用方に相異がある様である、此の経過については渡辺博士の詳しい解説がある(1951)。

1. *Epilachna vigintioctomaculata* MOTSCHULSKY

オオニジウヤホシテントウ

本種と次記ニジウヤホシテントウとの区別点を掲げると次の如くである。

1. 体やや大形、体を側面から見ると背面が高く三角形に近い。翅鞘の肩部が張つている、翅鞘の末端は概して長く、前背板の中央には縦に大きな剣状の黒紋がある、翅鞘黒紋やや大形、翅鞘の会合線に沿う黒紋は左右のものしばしばくつつく……
………*E. vigintioctomaculata* MOTSCHULSKY

— 体やや小形、体を側面から見ると半円形、翅鞘の肩部張らず翅鞘の末端は短し、翅鞘黒紋やや小形………*E. sparsa orientalis* DIEKE

扱本種の分布としては木下氏に依ると(1950) 関東北部、東山、東北両地区から北海道、北陸、山陰、房総半島の鋸山の一連の高地、伊豆、紀伊両半島の中央山地、四国の背栗山脈及び九州の中央山脈となつて居る。従来本種の南限界は年平均気温 14°C の等温線にニジウヤホシテントウの北限界は年平均気温 15°C の等温線に一致し、この両線間は両者混棲の地帯であるとし、標高については後者は四国 500 m、九州、479.5 m、本州、165 m が最高限度、前者は四国 490

[※]兵庫県産甲虫相資料 8

m九州、347.6m本州、124mが最低分布限度であると云う説があつたのであるが(高橋、1925、1932)、最近稲垣氏の京都府下の調査では(1949)温度は前説とはほぼ一致し、標高については後者は370m以下、前者は100m以上に産し其の間が両者混棲となつて居る。渡辺博士の研究(1949)は夏期平均気温(5~10月の平均気温)20.5°C線と21.5°C線の指す間の地帯をもつて分布南限とする説を発表されて居られる、此の両者の分布の問題は各地で次々と行はれて居る(横浜、八王子、大磯一中田、1949、横須賀一中田、1949、埼玉県北葛飾郡東和村一木下、1950、京都府一稻垣、1949 etc.)ただオオニシユウヤホシテントウがニシユウヤホシテントウよりも低温地で生育する事を実験的に稲垣氏は発表されて居られるし(1950)、小山氏は上田市で10月下旬幼虫の採集された事を記録されて居られる(1952)。

兵庫県下の分布状況は未だはつきりわかつて居らないが産地として確認出来た地点は美方郡大久保(640~650m)、同湯村附近千原(102m)、氷上郡佐治町(120m)、同芦田村(100~140m)、同神楽村(200m)、神戸市兵庫区鳥原(100m)であり、之等から判断して神戸市以北の地点には大体本種は分布して居り、其の間にニシユウヤホシテントウとの混棲地が存在して居る様に思はれる(ニシユウヤホシテントウの方は加古川から若狭湾に注ぐ由良川に至る低地帯には分布して居る、安江、1955、1956)。

本種の食餌植物は非常に多く小山氏に依ると7科36種も掲げられて居る(1950~1952)、時によつては植物の茎、花、果実、蜜腺等の部位或ひは樹液やキノコ類まで食するそうである(福田、1949)。筆者が在ソ中コルホーズで過した間、ジャガイモ畑にて本種が相当の被害を与えて居るのを見た。

最後に本種に良く似たコブオホニシユウヤホシテントウが京都で採集されて居るが、コブオホニシユウヤホシテントウとオオニシユウヤホシテントウとの区別の点では色々問題があるが兵庫県では未だ採集されて居ない様に思はれる、併し八王寺では海拔100m位の所で得られて居るし、京都では700m位ではあるがオホニシユウヤホシテントウと混棲して産して居る様なので採集出来る可能性はあると考えられる。

参考迄に本州に於けるコブオホニシユウヤホシテントウの産地は次の如くである秩父。(渡辺、坂上、1947)、会津若松(渡辺、1952)、群馬県土合清水峠方面(安富、1952)、尾瀬戸倉(安富、1952)、東京都南多摩郡恩方村~八王寺(安富、1952)、京都市左京区黒田村芹生、長野県東筑摩郡(朝比奈、1952)、新潟県(朝比奈、1954)。

(産地)神戸市鳥原(1♂、12-VI-1939)、氷上郡芦田村(1 Ex., 12-VI-1952、山本氏)、美方郡関宮町大久保(21♂♂、11♀♀、2-VI-1953、8♂♂、10♀♀、27-VI-1956)、美方郡湯村(1♂、27-VI-1952)。

(分布)日本(北海道、本州、四国、九州)、朝鮮、満洲、支那、印度、シベリヤ。

2. *Epilachna sparsa orientalis* DIECK

ニシユウヤホシテントウ

本種は海岸線に沿つて極めて普通に産する。

安江氏の調査に依れば(1956)日本海岸にも棲息し加古川河口から京都由良川河口に至る低地帯においても分布して居る事が報告されて居る。

ナス科植物の害虫。

(産地)神戸六甲山(中根、1955)、鳥原、丹生山、舞子、加古川

(分布)日本(本州、四国、九州)、沖縄、支那

3. *Afissa admirabilis* CROUCH トホシテントウ

本種は現在県下では氷の山山麓大久保にて採集して居るのみであるが山地性の種の様であり県下の北部方面にはまだ産地があると考えられる。

成虫、幼虫共にカラウスの葉を食する。

(産地)美方郡関宮町大久保(♂♂、2-VI-1955、2♂♂、27-VI-1956)。

(分布)日本(本州、四国、九州)、支那

Subfamily Coccinellinae

1. *Rodolia cardinalis* MULSANT ベタリヤテントウ

イセリヤカイガラムシを捕食する益虫であり、濠洲原産で北米や台湾等にも入殖されて居る。個体数はそう多くない様である。

(産地)神戸市鳥原(7 Exs., 19-IX-1943, 2 Exs., 20-IX-1943, 6 Exs., 9-VI-1950)

(分布)日本(本州、四国、九州)、台湾、ジャヴァ、オーストラリア、イタリー、スペイン、北及南アフリカ、アメリカ)。

2. *R. concolor* LEWIS アカイロテントウ

ムヂテントウの和名で知られて居た種である。全体赤褐色にして全面に灰白色、短細毛を装ひ無紋である。個体数は少い。

(産地)神戸摩耶山(1 Ex., 14-VI-1955)、六甲山(2 Exs., 10-VI-1955)、神戸税関構内(4 Exs., 1-VI-1939)。

(分布)日本(本州、四国、九州)。

3. *R. limbata* MOTSCHULSKY ベニヘリテントウ

カイガラムシを捕食する。普通に産する。ヤツデ葉上で多数採集せし事有り。4. 5月頃多し。

(産地)神戸六甲山、摩耶山、布引、鳥原、箕谷、谷上、美方郡氷の山。

(分布) 日本(本州、四国、九州)、シベリヤ、満州。

4. *Amida tricolor* HAROLD アミダテントウ

Scymnus 属に極めて良く似て居る、CROTSCH 氏に依り *Amida* 属を設定され之に属せしめられた (Rev. Coc. 1874)。 *Scymnus* 属との区別点は、複眼の内縁は一直線をなし二間並行し其間に縦長方形の顔面を現す。触角細長く11節より成り第1及第2節は大にして球状を呈し明に区分せらる。末端の三節は長球状を呈する。脛節の外側は小形にして爪は広き内歯を具う。

珍しい種であると思はれる。

(産地) 美方郡福定 (1 Ex., 2—Ⅶ—1953)

(分布) 日本(本州、四国、九州)。

5. *Stethorus punctillum* WEISE

キアシクロヒメテントウ

本種並びに *Scymnus* 属のものは *Scymnini* 族に属しいづれも小形種ばかりで記録されて居る種は可成り多いのであるが外観上良く似た種も多く其の同定は非常に困難を極める、其の分類学的研究も不十分で再調査を必要として居る。図説されて居る種もほんの1、2しかない現状なので、ますますもつて種名の決定は困難である。

族の特徴としては一般に体上に微細毛を密生し、触角は短く太く主として11節であるが第1節と第2節が癒合して10節となつて居る場合があり大部分が頭部より長くない。小腮鬚は小さく最後節の2節と3節とは扇形に近い斧状形を呈している。腹節第1節には脛節線を最する。

翅鞘は一般に条隆を欠如する。体長1.5~4mmで半円形又は卵形を呈する。

日本産 Tribe *Scymnini* の属の検索表

1. 腹節第1節の脛節線は中央(腹節第1節)に達せず後方に向い軌条をつける……………

……………Genus *Stethorus* WEISE

— 腹節第1節の脛節線は中央に達する……………

……………Genus *Scymnus* KUGEL

本種は東京産の標本で最初記録された(大田, 1931)非常に小形で(体長、1.2~1.4mm)あるので見落しがある様に思はれる、東京附近及び山形県での記録がある(宮森, 1956)。小灌木の葉裏に居り叩網で得られる。外観は良く *S. hilaris* に似るが体上の微細毛はやや少く若干艶ある如く見受けられる、 *Scymnus* 属とは上記の検索表に依つて区別出来る。

(産地) 神戸市烏原 (1 Ex., 25—Ⅳ—1954)、山の街 (1 Ex., 5—Ⅴ—1954)。

(分布) 日本(本州)、シベリヤ、歐州。

6. *Scymnus (Pullus) hilaris* MOTSCHULSKY

コクロヒメテントウ

Scymnus 属には日本産として次の4亜属が知られて居る、即ち Subgenus *Diomnus* MULSANT, *Pullus* MULSANT, *Scymnus* KUGELANN, *Nephus* MULSANT (太田氏はいづれも独立属として取扱つて居られるが属としての特徴は余りないので亜属の扱の方が適当と考えられる)。

兵庫県産としては *Pullus* 及び *Scymnus* 亜属を産する。

兵庫県産 Genus *Scymnis* の亜属の検索表

1. 脛節線は腹部の辺縁に還る完全な半円形又は半月形を呈し、前胸に2条の条隆を具える……………

……………Subgenus *Pullus* MULSANT

— 脛節線は腹節の辺縁に還らず不完全な曲線を形成する……………Subgenus *Scymnus* KUGELANN

本種は普通に得られる種である。体は黒色、頭、翅鞘、脚、腹の末端は赤褐色、背面には微少の点刻と灰白乃至黄色の短い軟毛とが密にある。本種には一異常型が記録されて居り(ab. *awanus* OHTA, 1929)、高砂が掲げられて居る。

(産地) 宝塚、武田尾、神戸市摩耶山、烏原、山の街、金剛童子山、丹生山、舞子 (OHTA, 1929)、高砂 (OHTA, 1929)、水上郡柏原、美方郡福定、朝来郡生野。

(分布) 日本(北海道、本州、四国、九州)、インドビルマ、セイロン。

7. *Scymnus (Pullus) niponicus* LEWIS

アカスジヒメテントウ

翅鞘上に黄褐色の縦紋を明瞭に有し特徴ある種である。非常に珍しい種だと思はれるが異常型2種 ab. *munagronis* OHTA, ab. *nigriceps* OHTA が共に高砂から記録されて居る。

(産地) 神戸市広野 (1 Ex., 15—Ⅳ—1956)、神戸市高砂 (OHTA, 1929)。

(分布) 日本(本州、四国、九州)、台湾、朝鮮。

8. *Scymnus (s. str.) pilicrepus* LEWIS

オオヒメテントウ

Scymnini 族中最大の体長を有する。体は卵形、巾広く著しく膨隆する。体表全体に灰白色の微毛を密生する。頭部は暗赤色。前背板、翅鞘は黒色、翅端のみ暗赤色を呈する。体下は黒色、灰白色の短毛と小点刻を密布し、脚は褐色、腹節第1節の脛節線は腹板前縁に還らぬ不完全な曲線で腹板前縁より $\frac{3}{4}$ の所で消失する。珍しい種と考えられる。

(産地) 神戸市摩耶山 (1 Ex., 14—Ⅶ—1955)。

(分布) 日本(本州、四国、九州)。

9. *Scymnus* (s. str.) *sylvaticus* LEWIS

クビアカヒメテントウ

体は黒色然し表面に灰白色の軟短毛を密に装うためネズミ色がかつている。背面は著るしく膨隆する。頭部及び前背板は黄褐色を呈する。翅鞘黒色、翅端は黄褐色で縁取られる。

腹部第1節に存する腿節線は腹板前縁に帰らず $\frac{3}{4}$ の所に於て消滅する不完全な孤線を作つて居る。脚は前、中、後脚共に黄褐色、ただ後脚の腿節が暗色を帯びる。

個体数は余り多くない様である。

(産地) 宝塚 (1 Ex., 22—IV—1956)、神戸市摩耶山 (1 Ex., 14—VII—1955)、山の街 (3 Exs., 5—V—1954)、丹生山 (1 Ex., 5—V—1956)、広野、(1 Ex., 15—IV—1956)。

(分布) 日本(本州、九州)。

10. *Scymnus* (s. str.) *hareja* WEISE

キアシヒメテントウ

Scymnus 亜属の最小形種。体は黒色、著るしく膨隆する。体表面全体に灰色の細短毛を密に装う。頭部及び前背板は黄赤色。翅鞘黒色、翅鞘中央部に1個の黄赤色斑点を有する。

腹部第1節は黒色、2、3節の中央は黒色で他の節と2、3節の周囲は黄赤色を呈する。

腹部第1節にある腿節線は腹板前縁に帰らぬ不完全な孤線を形成する。脚は黄赤色。個体数は普通ではないが記録は古くからある。

(産地) Kobe (LEWIS)、摩耶山(三橋、1936)、鳥原 (1 Ex., 10—V—1956)、山の街 (1 Ex., 5—V—1955)、宝塚市武田尾 (1 Ex., 25—VII—1954) 氷上郡柏原 (1 Ex., 10—V—1953)。

(分布) 日本(本州、四国、九州)、台湾。

11. *Hyperaspis japonica* CROUCH

ウスフタホシテントウ

黒色の翅鞘に2つの黄色の斑紋がある小形種である。*Scymnus* 属に似て居るが上面に毛を有しない点異なる。

(産地) 神戸鳥原 (1 Ex., 9—IV—1939, 2 Exs., 11—VII—1939)、山の街 (2 Exs., 22—V—1949)、美方郡関宮町福定 (1 Ex., 2—VII—1953)。

(分布) 日本(本州、九州)。

12. *Platynaspis lewisi* CROUCH ヨツボシテントウ

体はほぼ半球状、全面一様に軟色を有する。

赤色で黒色の斑紋がある。本種は *Sticholotis punctata* CROUCH (ムツボシテントウ) と言うのに良く似て居る種であるがムツボシテントウの方は県下に産しない様に思はれる。

本種も個体数は余り多くない。

(産地) 川西市多田 (1 Ex., 22—VI—1942)、神戸市鳥原 (1 Ex., 15—VI—1942)、箕谷 (1 Ex., 18—VI—1948)、丹生山 (2 Exs., 5—V—1956)、美方郡福定 (1 Ex., 2—VII—1953)。

(分布) 日本(本州)、台湾、支那、ビルマ。

13. *Chilocorus Kuwanae* SILVESTRI

ヒメアカボシテントウ

本種は極めて普通に産する種である。日本全土と中国に分布し介殻虫駆除の目的のためイタリー、アメリカへ輸入された事がある。1年2回の発生にして幼虫は3回の脱皮をなし冬期は成虫態にて樹幹の割目又は枯葉等の間に潜伏越冬する。食物は主に介殻虫にして蚜虫及綿虫を食することあるも極めて稀れであると、介殻虫は主に桑の介殻虫を嗜好し、サンホーゼ介殻虫が之に次ぐ。幼虫期の一頭の本種は介殻虫を7~800頭捕食し、成虫は一日平均20~40頭を捕食し成虫の生存日数約35。6日として約800~900頭を捕食する勘定になるそうである(桑名、村田、1910)。

(産地) 神戸六甲山、鳥原、丹生山、長田、美方郡福定。

(分布) 日本(北海道、本州、四国、九州)、支那。

14. *Chilocorus rubidus* HOPE アカボシテントウ

黒色光沢ある種にして前種より遙かに大形にして幅は長さより小なり、翅鞘上に長形の紅色紋を縦置する。個体数は少い。

(産地) 神戸六甲山 (1 Ex., 6—X—1939)。

(分布) 日本(北海道、本州、九州)、満洲、蒙古、支那、ウスリー、ネパール、インド、セレベス、オーストラリア。

15. *Synonycha grandis* THUNBERG オオテントウ

大形のテントウである。半球状にして全体橙黄色を呈し、翅鞘上に黒紋を有する、翅鞘の接合部に存する二対は合ひ接し一紋の如き感じを呈する。次種ハラグロオオテントウに良く似て居る。非常に少い種である。

(産地) 神戸市山の街 (1 Ex., VII—1940)、谷上 (VII—1952、中根、1955)。

(分布) 日本(本州、四国、九州、奄美大島)、沖縄、台湾、フィリピン、ボルネオ、印度、オーストラリア、満洲。

16. *Calliaria superba* MULSANT

ハラグロオオテントウ

前種に似るが前胸広大にして前方に突延し、翅の前縁角著しく円く且つ体下黒色なる事に依り区別出来る。

翅鞘の斑紋の位置も前種と同じであるが翅鞘の接合

部に存する二対明かに分離して居る。

珍しい種と思はれるが中根氏に依り西宮が記録されて居る。

(産地) 神戸市摩耶山(増田、橋本、1940)、西宮市(V-1952、中根、1955)。

(分布) 日本(本州、四国、九州)、琉球、台湾、印度、ヒマラヤ、チベット。

17. *Aiolacaria mirabilis* MOTSCHULSKY

カメノコテントウ

本種も大型のテントウムシでクルミハムシの幼虫を捕食する益虫として有名。赤色の分泌物を出す。

個体数は少いが高地帯に広く分布する様である。

筆者が1947年9月ナホトカの海岸に於いて本種の群飛するのを見たが日本産のものより淡色であつた。

(産地) 神戸市六甲山(1 Ex., 3-VI-1938, 1 Ex., 15-VI-1956)、氷上郡神楽村(1 Ex., 29-VI-1952)、美方郡大久保(1 Ex., 25-VI-1955)、氷の山(1 Ex., 12-VI-1955)。

(分布) 日本(北海道、本州、四国、九州)、支那、台湾、シベリヤ。

18. *Coccinula crotchi* LEWIS マクガタテントウ

本種は個体数少い種である。前胸は黒色、前縁少しく淡黄色、稜状部は黒色なり。翅鞘の上部は大部黄赤色にして其中央稜状部に於て黒色を界し恰も黒幕を縛り上げたる如き観あるを以て此の名称がある。

(産地) 伊丹(VI-1940、中根、1955)、仁川(1 Ex., 21-X-1956)。

(分布) 日本(北海道、本州)。

19. *Coccinella septempunctata bruckii* MULSANT

ナナホシテントウ

本種は極めて普通に産する種である。原種は日本並びに其の周辺以外の旧北区に広く分布して居る。本亜

種は原種と次の諸点で区別される。

翅鞘上の7黒紋はすべて大形より丹い(特に肩部後方外縁の1紋を除いた6紋が顕著、翅端の1紋は判然横長い)、やや大形、より半球状を呈する、点刻はやや大形で密度が粗い翅鞘の色はより暗色。

筆者がソ連カザンク共和国で見た本種も原種で黒紋が小さかつた、同地に於いても普通に見られた。

本種の斑紋の変化はテントウムシ程著しい変異は現はれないが多数の個体の中には可成りの変化が現はれる、増田氏は(1941)高取山産のものに *ab. takatoriensis* MASUDA、六甲山産のものに *ab. yasutanii* MASUDA と夫々命名されて居られる、併し此の変化に就いては栗崎氏(1915)、加藤氏(1936)も夫々違つた型を图示されて居られ、吉田氏は(1948)北海道各地の個体に依り斑紋変化を調べられたが之等の斑紋の変化は個体数が増すにつれ当地方に於いても相当出て来るものと考えられる。

安谷氏は左右不相称変異の例を西代産(VI-1937)、板宿(13-VI-1937)の2例で発表されて居る(1939)。

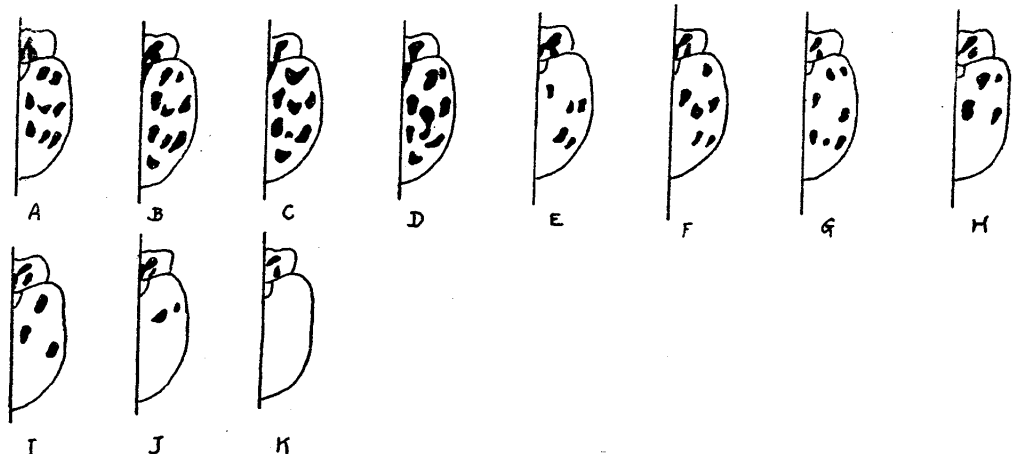
(産地) 西宮市香櫨園、神戸市六甲山、鳥原、高砂津名郡開鏡、美方郡福定。

(分布) 日本(北海道、本州、四国、九州)、琉球、台湾、朝鮮、支那、印度。

20. *Coccinella transversoguttata* FALDERMANN

クロオビテントウ

本種(FALDERMANN, Mem. Acad. Pterersburg, II, P. 454, 1835)は産地として北海道(函館、札幌)、本州(新潟、兵庫)が掲げられて居るのであるが栗崎氏(1922)も標本を得て居らず BRITTON 氏(Conn. Agr. Exp. Sta. Bull. 181, p. 16, f. 13, 1914)の図及び記載を記して居られる、栗崎氏の記載以外本種の事に就ての文献を知らない。翅鞘赤色で基部に黒色の横帯を



Harmonia axyridis (PALLAS) テントウムシの翅鞘に於ける斑紋の変化

有し背面の中央に2個の同色帯紋状を横置き、更に翅鞘端に近く二紋を装うと云うのが主な特徴である。一応記録種として記して置く。

(産地) 兵庫 (LEWIS, 1896)

(分布) 日本(北海道、本州)、北支那、シベリヤ、北アメリカ、メキシコ。

21. *Harmonia axyridis* (PALLAS) テントウムシ

極めて普通に産する種である。斑紋の変化も亦極めて多い。翅鞘は黄褐色で19黒紋を有するもの(図B)を var. 19 *signata* FALDERMANN と云うが此の黒紋は次第に消失して無紋に迄(図K)に至る。前胸背板は黄色で5個の小黒紋をM字状に配列する(図F, I, J)之等のうち中央の1紋は最も小さく、不鮮明になり勝ち(図A, E)で中には全く消失したものもある(図H, K)他の4紋は左右2個づつ両側より斜中央に向つて縦引し、大形で両側夫々1斜条状に融合し易く、更に全部融合する傾向がある(図A, B)。翅鞘の黒紋に到る迄種々段階があるが黒紋が少くなるに従つて前胸背板の黒紋は融合せずにはつきりしてくる。

翅鞘黒色の地に12個の黄褐色紋を有するものを var. *axyridis*, 4個または2個のものを var. *spectabilis* FALDERMANN と称する、此の斑紋の変化は個体数を集める程変化さまざまである。

(産地) 川西市多田、西宮市香榎園、神戸市～六甲山、摩耶山、鳥原、山の街、箕谷、金剛童子、大池、舞子、広野、津名郡岩屋、美方郡福定、大久保、氷の山。

(分布) 樺太、日本(北海道、本州、四国、九州)、シベリヤ、北滿、支那、朝鮮、琉球、台湾。

22. *Myrrha quinquedecimguttata* FABRICIUS

シロジウゴホシテントウ

前背板と翅鞘の斑紋は黄土色、前背板に4個、翅鞘に各々6個の斑紋を1. 2. 2. 1の順序に並ぶ。体は明黄褐色。肩部前方の1小紋は不明瞭。個体数は少ない。

(産地) 神戸市鳥原 (1 Ex., 9-V-1939, 1 Ex., 10-VI-1956) 山の街 (1 Ex., 3-VII-1955)

(分布) 日本(北海道、本州)、シベリヤ、支那、インド、ヨーロッパ。

23. *Proplacea japonica* THUNBERG

ヒメカメノコテントウ

翅鞘の大部分は橙黄色で黒色の斑紋を有し、腹面は黒色、前背板にある黒色斑は♂♀によつて異なる、♀では前縁が円く突出し、♂では前縁の中央に切れ込みがある。

翅鞘の斑紋は変化がありそれに依つて次の如き型が知られて居る、即ち会合線の縦紋並に肩部と中央の2

紋のみのもの ab. *dionea* MULSANT、会合線の縦紋と肩部の1紋のもの ab. *feticiea* MULSANT 会合線の縦紋のみを残して他は消失するもの ab. *lineta* KURISIKI、之等は個体数を採集すれば得られる。極めて普通に産する種である。

安谷氏は本種の斑紋の左右不相称変異の一例を長田池田村産 (1 Ex., 22-VI-1938) のものに依り発表されて居る (1939)。

(産地) 西宮市香榎園、神戸市六甲山、鳥原、金剛童子、佐用郡上月、美方郡福定。

(分布) 日本(北海道、本州、四国、九州)、ウズリ、支那、台湾、インド。

24. *Synharmonia hirayamai* HIRAYAMA

ウスキホシテントウ

体の大きさ前種に似るが体背面光沢ある黒色にして前胸背の外側及翅鞘の外側は黄色を呈し、翅鞘には各3個づつの黄色い斑紋を有する美しい種である。

個体数は少いと考えられる。

(産地) 西宮市香榎園 (1 Ex., 2-V-1941)、神戸市山の街 (1 Ex., 15-VII-1949)。

(分布) 日本(北海道、本州、四国)。

25. *Anatis ocellata halonis* LEWIS

ウンモンテントウ

体の表面は黄褐色、頭の大半と前背板、翅鞘の斑紋は黒色、ただし翅鞘の斑紋は黄色環で縁どられて居る。此の黄色環を有する黒色紋は2. 3. 3の配列をなして居る、此の特徴に依り簡単に他種と区別出来る種である。翅端には各1個の黄紋を有する。

氷の山で1頭採集して居るのみであるから産出状況はわからないが珍しい種であると考えられる。

原種はヨーロッパからシベリヤに普通の種である。

(産地) 美方郡氷の山 (1 Ex., 2-VII-1953)。

(分布) 日本(北海道、本州、四国、九州)、樺太、千島。

26. *Neomysia nipponica* HIRAYAMA

ジウウロクテントウ

体表面は黄褐色、前胸背の外側及翅鞘の斑紋は黄白色。前胸背並びに翅鞘共に黄褐色にして前胸背側縁は極めて僅かに縁取られ、黄白紋を有す。小楯板は三角形を呈し翅鞘上に黄白色の斑紋を左右対称的に16個を有し、左右側縁肩部より下方に向い $\frac{1}{2}$ 迄黄色にして縁取られる。

珍しい種と思はれる。中根氏に依ると *Neomysia oblongoguttata* LINNÉ の亜種かも知れないとの事。

(産地) 神戸市再度山 (1 Ex., 19-VII-1939)。

(分布) 日本(本州)。

27. *Thea cincta* FABRICIUS キイロテントウ

本種は白渋菌を食する益虫である。体は淡黄褐色、頭と前背板は黄白色、翅鞘は黄色、複眼と前背板の2紋は黒色である。5月頃より出現する。

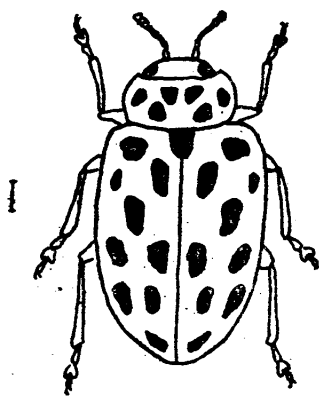
(産地) 神戸市鳥原 (1 Ex., 24—V—1953)、高砂 (1 Ex., 2—VII—1953)、美方郡福定 (1 Ex., 2—VII—1953)。

(分布) 日本(本州、四国、九州)、沖縄、台湾、朝鮮、支那、インド、フィリピン、スンダ諸島。

28. *Anisosticta kobensis* LEWIS

ジウクホシテントウ

体は扁平長楕円形にして光沢ある淡青色を呈する。頭部、帯黄赤色にして其後縁前胸との接合部は黒色なるも中央は地色陥入して僅かに連絡を保つ。複眼は黒色触角は基部細く先端は紡錘状に膨大す。長さ殆ど前胸の中央に達す。点刻は細微にして密なり。



Anisosticta kobensis
LEWIS

胸節前胸背には六個の大なる楕円形の黒紋を装ひ其内四個は前縁に他は後縁に沿ひて位置す。頭部と殆ど同様に点刻される。小楕板は黒色にして前胸と同様なる点刻を装う。翅鞘には19個の長楕円形の黒紋を装ひ内1個は小楕板上に位置す。各翅鞘上に於ける斑紋排列の様式は $1\frac{1}{2} + 2 + 3 + 2 + 1$ 。点刻は大にして判然とする。

腹板は黒色なるも両側及末端の2、3節は黄褐である。脚も黄褐色を呈する。

本種は欧州産の *Anisosticta novemdecimpunctata* LINNÉ と云う種に良く似て居り LEWIS 氏は次の諸点で区別されて新種とされたのである(Ann. Mag. Nat. Hist., 6, XVII, p. 25, 1896)。

1. 斑紋の後者(A. novemdecimpunctata)より大なり。
2. 色沢の後者より青白なること。

3. 脚の後者より細長なること。

4. 体の輪割後者より細長なること。

5. 点刻の後者より大にして判然とせること。

併し乍ら欧州の図及び記載を見ると(G. PORTEVIN, Histoire naturelle des Coléoptères de France Tome I, p. 261, 1931; E. REITTER, Fauna Germanica, II, Die Käfer des Deutschen Reiches, pp. 137~138, pl. 100, f. 13, 1911)區別して別種にするのはどうかと思はれる、尤も栗崎真澄氏も同一種として取扱つて居られる(動物学雑誌 XXV, 413, pp. 101~102, 1923)亜種位になるのではないだろうか? 欧州産の標本と比較調査する必要がある。体長 3.5 mm。

珍しい種で宝塚の池畔の葦の朽ちた所に於いて得たのみである。白渋菌が其の葦にあつたのでそれを食するのではないだろうか?

(産地) 宝塚 (3 Exs., 22—IV—1956)。

(分布) 日本(北海道、本州)。

29. *Vivida duodecimguttata* PODA

シロホシテントウ

体は明黄褐色で光沢があり、頭の大半と前背板、翅鞘の斑紋は黄白色、前背面には外縁に沿つて各1個の中広い黄白紋があり、各翅鞘に6個の黄白紋を有し大体 $2 + 1 + 2 + 1$ の順序に並ぶ。この斑紋は消失する事があるそうであるが県下産では今の所出て居らない。

成虫も幼虫も白渋菌菌類を食する。普通に得られると思う。

(産地) 神戸市鳥原 (1 Ex., 10—VI—1940)、山の街 (1 Ex., 17—V—1953)、丹生山 (1 Ex., 5—V—1956)、金剛童子山 (1 Ex., 24—VI—1956)、箕谷 (1 Ex., 18—V—1948)、高砂 (2 Exs., 30—V—1954)。

(分布) 日本(北海道、本州)、朝鮮、シベリヤ、ヨーロッパ、コーカサス、アジア。

以上兵庫県産てんとうむし科として2亜科32種を記録した、其の内日本特産種としては9種を産し他の23種は其の大部分が朝鮮、支那、シベリヤに分布し若干ヨーロッパ共通種があり亦南方系の種もいくらか含まれている。

前文にも書いた如く本報文は其の大部分が神戸市中心の調査結果であり県下の広範囲の調査に依り更に種の追加も現れて来る事であり今後出来るだけ努力して一日も早く県下てんとうむし相を明瞭に致し度いと考へて居る。

参考文献

栗崎真澄: 既知及未知本邦産瓢虫の種類に就いて
昆虫世界, XIX, 212, pp. 142~144, 214, pp.
(305ページへ)